

使徒の働き9章1－19節「迫害者を宣教者を選ぶ神」

1A 殺害しようと息巻くサウロ 1－2

2A 天からの光 3－9

1B 迫害されるイエス 3－6

2B 目の見えないサウロ 7－9

3A 弟子アナニアへの命令 10－16

1B サウロへの按手 10－12

2B 主への反論 13－14

3B 選びの器 15－16

4A 聖霊と水のバプテスマ 17－19

本文

使徒の働き 9 章を見ていきます。9 章において、パウロが、キリスト者に対する激しい迫害者から、福音を語る宣教師の召しを受け、回心するところを見ます。パウロは、後にユダヤ人や総督たちの前で、証言をし、また彼自身の手紙に、その回心のことについて数多く書いています。なぜ、この回心が大切なのか？それは、10 章にも続く、ペテロの福音伝道による、コルネリウスの回心と関連があります。パウロは、異邦人への使徒として選ばれるからです。コルネリウスの一家の回心は、後のエルサレムの教会で議論になるほどで、大きな出来事として捉えられます。ここに、ついに、イスラエルの贖い主が、異邦人の間でも受け入れられ、あがめられるという、神の約束とご計画が実行されていくからです。

1A 殺害しようと息巻くサウロ 1－2

¹さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、²ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。

8 章の始まりで、サウロがエルサレムで、「8:3 家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出して、牢に入れた」とあります。しかし、彼はそれでも怒りは収まりませんでした。主の弟子たちを脅迫し、脅迫するだけでなく殺害しようとまで考えています。「息巻き」とありますが、ほとんど過呼吸になるほどだったのです。

彼の頭の中では、主に対する熱情を考えていたことでしょう。偶像礼拝者に対して、主は、例えばモアブの女たちの誘惑で偶像を拝んで行ったイスラエル人を、ピネハスが剣でもって殺しました。（民数 25:1-5）。そして預言者エリヤは、バアルの預言者と対峙して、450 人を殺すように命じました（Ⅰ列王 18:40）。同じような熱情を抱いていたのかもしれませんが、しかし、彼自身が後に語って

いるように、「神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。(ローマ 10:2)」ということです。

サウロは、シリアにあるダマスコの諸会堂にも行って、そこでキリスト者を捕縛してエルサレムに引いてくる許可を、大祭司に求めました。ユダヤ人は、2 章で聖霊が下った時に見たように、ローマ社会の至るところに住んでいて、世界最古の町とも呼ばれるダマスコにも、大きなユダヤ人共同体がありました。聖書には、アブラハムがロトを救出するために、ダマスコまで言ったことが書かれています(創世 14:15)。そこに、この道の者たちがやってきて、異端の教えでそそのかしたら、大変なことになるという必死な思いで、出かけて行ったのだと思います。

ところで、この時点で「キリスト者」という言葉は使われていません。「この道」と呼ばれていました。聖書には、「正しい者の道」(詩篇 1:6)とか、「主の道」(イザヤ 40:3)という呼び名がありますが、彼らのことを「この道」と呼んでいました。イエスが、「マタイ 7:13 いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう」と言われました。また、「わたしが道である」と言われたからでしょう。「キリスト者」は、アンティオキアの教会で、周囲の人々がそのように呼ぶようになってから使われてきた言葉です。「キリスト教」といえば、「教え」の面が強いですが、「道」であれば、その生き方、生き様、生きている方向を示しています。こちらのほうが、本質に近いです。

2A 天からの光 3-9

1B 迫害されるイエス 3-6

³ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。

エルサレムからダマスコまでは、約 240 キロメートルあります。エルサレムの旧市街の城壁で、北側に最も利用されているダマスкас門というのがあります。それはエルサレムからダマスコに行く時に使う門であり、サウロもそこから出て行ったのではないか？と思われます。

ダマスコに近づいた時に、「天からの光」がサウロを照らしたのです。後に、別名がパウロですが、パウロが、「26:13 真昼に私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と私に同行していた者たちの周りを照らしました。」とあるのです。天からの光の中に、復活のイエスがおられて、栄光の姿に輝いておられました。

主イエスがベツレヘムで誕生された時に、夜なのにその周りが明るくなりましたね。その光です。創世記において、また黙示録において、どちらも、太陽や月の光がないのに、それで光があります。創世記には、第一日目に「光よ、あれ」と主が言われて、けれども第四日目に、太陽や月、星を造られています。その光は太陽の光ではなく、主なる神ご自身の光です。それから、黙示録の天のエルサレム、神の都においても、「21:23 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が

都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」とあります。

パウロは、その後の証言でこの経験を何度となく語りましたが、それは、自分の受けたものが、自分勝手な思いではなく、人から出たものではなく、実に神ご自身から受けたものなのだということを伝えたいからです。「ガラ 1:11-12 兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。12 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」ちょうどこれは、燃える柴の中から、主がモーセに語りかけ、それでモーセが、人のことばではなく、事実、神のことばを語っていることを後押ししています。

パウロには、特にその、天からの認証が必要でした。彼は、イエスと生涯を共にした使徒たちではありません。そのため、パウロが宣教の旅をしている時に、ユダヤ主義者らは、自分たちはエルサレムから来ているが、パウロは自分勝手に語っているだけだと、彼への信頼を落すことを行っていたからです。それを、ずっとパウロから牧会を受けていたコリントの人たちが、信じ込んでしまったと言う経緯もあります。コリント人への手紙第二は、これら偽教師らの中傷に対する、主の使徒としての弁明が主な内容です。

パウロは、自分がいかに罪深い者かを思いつつ、神の恵みによって使徒になったことを語っています。使徒であることは、主イエスの復活を目撃したことが条件ですが、彼はここ 9 章で復活のイエスにお会いしているのです。「Ⅰコリ 15:8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。」

私たちは、パウロのように直接、イエスの啓示を受ける者たちではありません。けれども、使徒たちが受けた啓示について、同じように神からの光に照らされて、目が開かれた者たちです。「Ⅱコリ 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。」自分の意欲や、肉の力によって、この知識に達することはできません。あくまでも、主からの御霊によって、真理に導かれ、それで真理を持っているのです。

⁴ 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

次に彼の回心には、「地に倒れ」というものがあります。それは天からの光を見たからですが、神の栄光を見て倒れてしまう人々が、聖書には出ています。預言者ダニエルは、イエス様ご自身ではないかと思われる主の使いの栄光を見て、「10:8 内からは力が抜け、顔の輝きも一変して、力も保てなくなった。」とあります。使徒ヨハネは栄光のイエス様の御姿を見て、「1:17 私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。」とあります。これは、圧倒的に神の栄光の前で自分に至らなさ、無力さ、汚れが明らかにされた姿です。

そして、「サウロ、サウロ」と二度も呼んでおられます。聖書の中で二度、名前を主が呼ばれる時は、親しい関係を持っている時です。幼いサムエルに、主が語りかけられる時、「サムエル、サムエル（Ⅰサム 3:10）」と呼ばれました。マルタとマリアが家にイエス様をお迎えした時に、マルタに対して、「マルタ、マルタ（ルカ 10:41）」と呼ばれました。主の弟子たちを激しく迫害しているサウロに対して、なんと、イエスはこの親しみをもって、語りかけられているのです。主がどれほど、憐れみ深いか知れません！

そして主は、「なぜわたしを迫害するのか」と言われました。主はご自分を信者と一体化させておられました。主が前もって世があなたがたを憎むと言われていました。「ヨハ 15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」主は、ご自分が選ばれた者が憎しみを受ける時、それはご自身が受けていると言われています。これは、イスラエルの民も同じで、神の民に危害を加える者たちを、「ゼカ 2:8 あなたがたに触れる者は、わたしの瞳に触れる者」と言い表しました。

したがって、サウロが迫害をしている時、それは主ご自身を迫害していることに等しかったのです。私たちが、キリストを信じているということで、憎しみを向けられたら、それは自分自身に対してではなく、主ご自身に対して向けていることを知るべきでしょう。

⁵ 彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

サウロはすぐに、「主」と呼んでいます。天からの光で、あきらかに、彼は天からの使いか誰かだと悟りました。そして、この方がイエスを知り、事実、主であることを知ります。この告白によって、人は救われることをパウロは、書いています。「ロマ 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。」これを、回心と呼びます。はっきりと悔い改めて、思い直して、この方にすべてを明け渡すことです。

彼は、これを光に照らされて瞬時に行いました。そして、それから三日間、目が見えなくなります。その後、彼はイエスの迫害者から、イエスの宣教者へと変わります。自分がそう自分を変えたのではなく、ありのままの自分に主が会ってくださったから、変わったのです。あまりにも多くの人が、自分を変えようとします。そうではなく、ありのままの自分を主の前に連れて行きます。そうすれば、主が私たちを変えてくださるのです。

パウロは、この方が主であることは分かりましたが、その名前が分かりませんでした。それで、

主は、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」とお答えになっています。

パウロは、この時にイエス様が次のようにも語ったことを、ヘロデ・アグリッパ二世の前で証言しています。「26:14 とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。」パウロは、激しく、弟子たちを迫害していましたが、それは彼がうすうす、この方に真理があるのではないかと思っていた裏返しでした。この、とげの付いた棒というのは、牛で畑を耕す時に、頸木を付けるのですが、それをいやがって、牛が足を蹴ることがあります。けれども、その蹴る先に棒を付けておいて、蹴ったらその棒の先に刺さるようにするのです。それで蹴るのをやめさせるのですが、すなわち、蹴れば蹴るほど、自分自身を痛めるのです。

サウロは、幼い時からユダヤ人として育てられました。「ピリ 3:5 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、」ベニヤミン族出身ですが、そこから初代王サウルが出てきましたね。そこから、サウロという名が使われています。彼は、ローマのキリキア属州で生まれ育ちましたが、エルサレムでガマリエルの下で教育を受けました。律法に精通していたからこそ、この道が外れていると思っていた時は、あってはならないと思い、激しく迫害したのです。

しかし、彼はステパノの説教を聞きました。御霊と知恵によって、反論の余地がありませんでした。そして彼は、ステパノの殉教の言葉を聞きました。迫害者たちの罪を赦してくださいと、イエス様と同じ祈りをささげるのです。その一連の姿を見て、彼の良心はずきずきと痛んでいたのです。この激しい迫害は、自分の良心の葛藤の裏返しだったのです。

⁶ 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。」

主はご自分の計画を進めておられます。けれども、初めから明らかにしておられません。サウロがご自分の指示に従うことによって、次にしなければいけないことを示されます。主は、このようにして私たちを、一步一步導かれます。ですから、信仰による従順です。

2B 目の見えないサウロ 7-9

⁷ 同行していた人たちは、声は聞こえてもだれも見えないので、ものも言えずに立っていた。

声が聞こえていましたが、音として聞こえていただけで、言葉としては判別できませんでした。ダニエルに主の使いが現れた時も、同行していた人たちは同じでした。「10:7 この幻は、私ダニエル一人だけが見て、私と一緒にいた人たちはその幻を見なかった。しかし彼らは大きな恐怖に襲われ、身を隠して逃げ去った。」

⁸ サウロは地面から立ち上がった。しかし、目を開けていたものの、何も見えなかった。それで人々

は彼の手を引いて、ダマスコに連れて行った。⁹ 彼は三日間、目が見えず、食べることも飲むこともしなかった。

これはまさに、彼にとっての死の三日間であったと言えます。目の見えない間、ちょうどイエスが十字架の死によって、三日間、墓に葬られていたように、パウロは、これまでの生き方や在り方に対して死を迎えなければいけないことを知る時だったのではないかと思います。そして、目が開けたあかつきには、彼は、はっきりと福音を宣べ伝える者に変えられていたのです。

パウロは、幼い時からユダヤ人として育てられました。「ピリ 3:5 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、」ベニヤミン族出身ですが、そこから初代王サウロが出てきましたね。そこから、サウロという名が使われています。彼は、ローマのキリキア属州で生まれ育ちましたが、エルサレムでガマリエルの下で教育を受けました。律法に精通していたからこそ、この道が外れていると思っていた時は、あってはならないと思い、激しく迫害したのです。

しかし、イエスが神の栄光の輝きをもって現れてくださったので、律法と預言がすべてこの方にあって成就したこと、この方が約束のメシアであり、神の御子であることが、すべてつながったのです。中途半端な律法の知識であれば達成できなかったことを、パウロは、徹底的に学び、また実践していたので、すぐに悟りました。キリストこそが律法の目標であり、この方にあって聖書が実現したことを知ったのです。パズルの最後の一片がはめられた、ということです。

3A 弟子アナニアへの命令 10-16

¹⁰ さて、ダマスコにアナニアという名の弟子がいた。主が幻の中で「アナニアよ」と言われたので、彼は「主よ、ここにおります」と答えた。

主はこれから、サウロが聖霊に満たされ、また水のバプテスマを受けるように導かれます。その時に、主はダマスコで、既に信じて、弟子となっているアナニアを用いられます。サウロは、後に異邦人の使徒となる大きな器ですが、彼にバプテスマを受けるのに、名もない普通の弟子をお用いになりました。主は、小さな器を大きなことに用いられる方です。

ここで大事ななのは、アナニアのしもべの態度です。「アナニアよ」と呼ばれたら、「主よ、ここにおります」と答えています。イサクを献げなさいと命じられた時、アブラハムは、「はい、ここにおります」と答えています（創世 22:1）。まだ幼かったサムエルも、「はい、ここにおります。」と答えています（Ⅰサム 3:4）。イザヤが主に遣わされる時も、「ここに私がおります。」と答えています（6:8）。主なのですから、あなたが言われることは何でも致します、という態度です。

1B サウロへの按手 10－12

¹¹ すると、主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』と呼ばれる通りに行き、ユダの家にいるサウロという名のタルソ人を訪ねなさい。彼はそこで祈っています。¹² 彼は幻の中で、アナニアという名の人が入って来て、自分の上に手を置き、再び見えるようにしてくれるのを見たのです。」

とても具体的な指示ですね。「『まっすぐ』と呼ばれる通り」ですが、今のダマスカスにもあります。東西に平行に走っている二つの主要街路のうちの一つです。¹そしてユダの家にサウロがいるとのことですが、初めからそこに滞在する予定だったのかもしれませんが。彼が、キリキア州のタルソ出身であることも教えておられます。ちなみに、私たち夫婦は2019年の春にタルソを訪れました。ローマの古代都市の遺跡が一部残っています。

そして大事なのは、サウロもまた、アナニアという名の人が入ってくる、しかも自分に手を置いて祈り、再び見えるようになると幻で語られていたことです。8章では、サマリア人に対して、エルサレムからペテロとヨハネが遣わされて、手を置きました。ここでは、アナニアがそれを行います。

大事なのは、アナニアにも語られ、サウロにも語られていました。10章においても、ペテロにも語られ、また百人隊長コルネリウスにも語られました。双方に主が語られています。時々、「私は主に語られました。あなたは、これこれをすべきです。」と預言のようにして指示してくる人がいますが、主が語られる時は、一人だけでなく、二人、また三人の証人を置かれます。ですから、双方がそういう思いが与えられている時に、主によるものと確認できるのです。

2B 主への反論 13－14

¹³ しかし、アナニアは答えた。「主よ。私は多くの人たちから、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。¹⁴ 彼はここでも、あなたの名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから与えられています。」

主よ、とは呼んでいるものの、この指示に対してついて行けない、理解ができないという気持ちはよく分かります。エルサレムにおける迫害の急先鋒がサウロであり、それをダマスコにまで及ぼそうとしてやって来ていたことを、アナニアは聞きつけていたからです。

ところでアナニアは、主の弟子たちを、「あなたの聖徒たち」と呼んでいますね。これは、聖なる神に選ばれて、神のものにされている人々という意味合いがあります。私たち信者は、みながキリストの血によって神のために聖別された者たち、聖徒であります。アナニアは、主ご自身のものにサウロは触れていると訴えています。

¹ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%B4%E7%B7%9A%E9%80%9A%E3%82%8A>

3B 選びの器 15-16

¹⁵ しかし、主はアナニアに言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

主は、アナニアの訴えにも関わらず、「行きなさい。」と命じられます。それには、彼にイエスご自身が使命を帯びさせているからです。

ご自身の名を、三種類の人々に運んでいく人だということです。一つは、「異邦人」です。ここが、パウロの召しの大きな部分です。彼は、「私は割礼を受けていない者への福音を委ねられている」と言っています(ガラ 2:7)。彼は、他の使徒たち以上に宣教の働きに従事しました。そして新約聖書の手紙の多くが、パウロによるものであり、今の世界にいる、ユダヤ人ではない者たちがイスラエルのメシアを信じているのも、彼の働きによることが大きいのです。

パウロは何度となく、手紙の中でこの召命について話しています。「ガラ 1:15-16a しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされた・・」彼は、タルソという、ギリシアの学問や文化の強いところで生まれ育ちました。けれども、エルサレムでガマリエルの下で律法を学びました。そして、生粋のパリサイ人です。ですから、聖書に精通し、なお、それを異邦人たちの言葉や文化、考え方を知っていますから、彼らに対してどう伝えればよいか、わきまえていました。

また、生まれつきのローマ市民です。その時のローマ帝国があり、すべての路がローマに通じると言われるほど、整えられていました。そして一般の人たちはギリシア語を話していました。分かりやすくいうなら、日本と朝鮮半島と中国大陆が、すべて一つの帝国で、一つの言語でまとまっていたということです。それで、人々は妨げられることなく行き来できたのですが、そのような特別な時に、パウロが、生まれた時から母の胎内で神の恵みによって召されていました。

そして、「王たち」と言われています。パウロは、エルサレムで騒動が起こってから、ローマの千人隊長に保護され、そのまま総督の住むカイサリアに移されました。そこで総督たちのまえで弁明し、またヘロデ・アグリッパ二世の前で証しをしました。それから最後に、ローマでカイサルの前で証言をしました。

そして、「イスラエルの子ら」と言っています。彼は異邦人への使徒と自分でも呼んでいますが、同胞の民をないがしろにしていたのではありません。むしろ、愛に満たされていました。ローマ9章では、同胞のことで心が痛み、「のろわれた者となってよいとさえ思っています。」とまで言っています(3 節)。彼は伝道する所はシナゴグであり、同胞の民に語っていました。そして、三回の宣教旅行を終えた後、エルサレムへの旅をし、そこでヘブル語で証しをしたのです。こうやって、主は予め、パウロがご自分の名を携える器となることを知っておられて、選んでおられたのです。

¹⁶ 彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」

主は、アナニアにさらに励ますために、彼が苦しむことも予め示すと伝えておられます。苦しまなければならないのに、なおのこと選ばれて、その召命に忠実に従うのだということを伝えられて、アナニアが、サウロは敵でも危険でもなく、これから神の選びの器として用いられるのだと納得することになります。

これから読んでいきますが、サウロは初めからユダヤ人に殺意を抱かれ、逃亡するところから始まります。宣教旅行は、逃亡劇とセットで前進していきます。そして、一度ぜひ、コリント第二 11 章 23 節から 27 節まで読んでみてください。どれだけの苦しみを経たのか、想像できないほどの過酷さです。それであっても、キリストを知ったことのすばらしさのゆえに、これまでの人生の業績が塵芥であったということなのです。

4A 聖霊と水のバプテスマ 17-19

¹⁷ そこでアナニアは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

アナニアは、疑念を抱いていたことでしょう、けれども従いました。そして、そのまま従って彼に手を置きます。「兄弟サウロ」と呼びかけています。すでに敵ではなく、兄弟なのです。

それから、「聖霊に満たされる」という約束を伝えています。聖霊が初めに下られた時から、ペテロや他の使徒たちは、この約束を信じていました。悔い改めてバプテスマを受け、罪が赦されて、聖霊の賜物が与えられるというものです。

¹⁸ するとただちに、サウロの目から鱗のような物が落ちて、目が見えるようになった。そこで、彼は立ち上がってバプテスマを受け、^{19a} 食事をして元気になった。

「目から鱗」という日本語のことわざがありますが、聖書から来ています。サウロは、目が見えるようになりましたが、それは物理的な目のみならず、霊的な意味も含まれます。心の目が開かれて、彼は新しい人になりました。バプテスマによって、そのことを表明しました。キリストと共に古い人に死んでいること。そしてキリストと共によみがえり、新しいいのちにあずかっていること。それから、三日ずっと食事をしていなかったのを、元気づくために食事をしています。

いかがでしょうか？主が、なぜ、人一倍の迫害者を、人一倍の宣教者として選ばれたのでしょうか？パウロ自身がテモテに話しているところを読みます。テモテ第一 1 章 12-17 節です。

12 私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださったからです。

パウロは、自分が忠実な者となっているのは、自分自身ではなく、キリストが任命されたという、神の恵みによるものだとしています。

13 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。14 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。

これまでの、とんでもない罪は憐れみで、赦されました。それだけではありません。主の恵みが、キリストにある信仰と愛で満ちあふれているのです。

15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

はっきりと、罪人のかしらだと言っています。

16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。

ここです。「この上ない寛容」です。パウロが選ばれたのであれば、他の人々も、どんなに受けるに値しないのに、神の恵みにあずかれることを教えてくれるのです。神の寛容がいかに優れているのかを知るために、パウロを選ばれたのです。ここまですごいお方なのです。

17 どうか、世々の王、すなわち、朽ちることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

主の恵みこそが、神ご自身に栄光が帰されます。私たちが、この福音を携えていることを覚えましょう。自分自身が、受けるに値しない神の恵みを受けているということ。その中で培われ、人々に恵みで接すること。そして、教会が、恵みのない世界に恵みを伝えること。こうやって、神に栄光が帰されるためなのです。